

# さまざまな視点から アメリカ文化の 光と影を読み解く

Navigator

文学部 / 英語文学文化専攻

## 中尾 秀博 教授

Hidehiro Nakao

中尾 秀博 (なかお ひでひろ)

1956年12月、神奈川県生まれ。修道高等学校卒業。東京大学大学院人文科学研究科英語文学専攻修士課程修了、同大学院人文科学研究科英語文学専攻博士課程中退。明治大学政治経済学部助教授、中央大学文学部助教授等を経て、1997年より中央大学文学部教授、現在に至る。2013年より中央大学入学センター所長も務める。

### 作品の世界観を構成する 文化的な要素に着目

中尾先生がアメリカに興味を持ったきっかけは、映画や音楽などのポップカルチャー、そして建国の精神に関心を抱いたことだった。大学・大学院ではアメリカ文学を専攻し、ピュリタンと文学との関わりや、移民の文学について研究していた。

そんな先生が転機を迎えたのは、教員になり、講義である作品を取り上げようとした時だった。それは、『グレート・ギャツビー』。アメリカの作家スコット・フィッツジェラルドが1925年に発表した小説である。「この作品は1922年を舞台にしていますが、同時代の空気を表現するためにいくつもの曲が作中に登場します。それらの曲を実際に聴かせようと思いい、登場する曲を一つひとつ調べていったのです」

ある章に、曲名の後に歌詞が掲載されている箇所があった。先生は当然その歌詞を登場した曲名のもので受け止めていたし、翻訳本を見てもそのように訳されていた。ところが、曲名をもとに歌詞を調べてみると、作品に出てくるものとは異なっていた。「作品と同時代のアメリカを生きた読者であれば、登場する曲名と歌詞が同じ曲のものではないことが当たり前のようにわかるでしょう。しかし、作品の世界観を構成している文化的な要素は、作品が発表されたものとは違う時代や地域で

は通用しない記号になってしまいう。そのことを改めて認識したのです。この経験から、作品に登場する文化的な要素に注目するようになりまし「た」そして先生の研究は、アメリカの文学よりも文化の方へより近づいていくことになった。

### アメリカ文化を多角的に理解し 知米の姿勢を育む

しかし、文化的な要素に着目して掘り下げていくと、作品に対してただ「面白い」「楽しい」といった感想を持つだけでは済まなくなる、と先生。有名な『ウェストサイド物語』を挙げて説明してくれた。「これは、シエクスピアの『ロミオとジュリエット』に着想を得たもので、1950年代のマンハッタンを舞台にしたミュージカルです。東欧系移民とブルトリコ系移民のグループの抗争を描いているのですが、この中に「アメリカ」という曲が登場します。自由などアメリカのポジティブな面を女性グループが、人種差別などネガティブな面を男性グループが歌い上げる。アメリカ社会の光と影を、マインリテイである移民が提示するという構造です」ここで示されている負の面は、作品発表から約60年たった現代でも解決されていない。放置され温存されてきた、と先生は言う。「この作品はいろいろな角度から味わえ、今見ても興味が尽きません。理想と現実の対立を描いた60年前の作品がいまだに色褪せない、その点

にアメリカという国の複雑さと面白さを感じます」

一方で、「自由と平等の国」というアメリカのポジティブな面は今でも強い引力を持っている、と先生は続ける。「これはアメリカ人のプライドともなっており、私たち他文化の人間が尊重しなければならぬ面でもあります」知れば知るほど、アメリカ文化に対する感情は複雑に入り乱れてくる、と先生は語る。「私はアメリカ文化に関する授業で、映画や音楽などのポピュラー・カルチャーを題材に取り上げながら、アメリカ文化の問題点を指摘しています。現代日本において、良くも悪くもアメリカ文化の影響を受けずに暮らしていくことはできません。ですから好き嫌いは別にして、アメリカ文化への理解を持つていた方がいい。親米・反米ではなく、知米の姿勢を持つことが大切だと思っています」

### 被支配者の視点から アメリカという存在を見つめる

もう一つ大きな柱となっているの



移民や先住民など、アメリカ社会における少数者の存在に着目していきたい、と先生は語る。



研究室には、先生の研究モチーフでもあるポルトレートが数多く飾られている。

が、オセアニア地域を中心とした環太平洋文学文化の研究。特に、ポルトレート（人物写真）を題材とした研究に取り組んでいる。「いつ、誰が撮影したのか、なぜこの被写体カメラが向けられたのか。1枚の写真はさまざまな背景を有しています。それぞれの要素を調べて解きほぐし、そこに込められている文化的なストーリーを解明していきます」

先生は研究室の本棚に置かれている、ユニフォーム姿で旗を広げ持つ女性のポルトレートを手に取った。「彼女はオーストラリア先住民アボリジニの血を引き、シドニーオリンピック（2000年）の陸上400m走で金メダルを獲得したキャシー・フリーマンというアスリートです。この写真は、コモンウェルス・ゲームズ（英連邦競技大会）で優勝したキャシーが、ピクトリー・ランでアボリジニの旗を掲げた様子をとらえたものです」彼女の表情は少し曇っているように見える。以前の大会でも同様の行動を取り、白人系である選手団長に激しく叱責されたといわれ

ている、と先生は解説してくれた。「そもそも『コモンウェルス』とは、イギリスとかつてその植民地であった地域からなる国家連合のこと。コモンウェルス・ゲームズは、イギリスはもちろんカナダやインド、オーストラリアなどが参加するスポーツの祭典ですが、イギリス女王・エリザベス2世が開会の宣言を行うことからもうかがえるように、政治的な要素がつきまとうものでもあります」

ピクトリー・ランでは通常、その選手が属する国の旗を掲げるが、アボリジニの旗を手にしたキャシーには先住民の誇りを表明しようという意思があったと考えられる。また彼女はアボリジニの旗にオーストラリアの旗を重ね、時折裏表を返して双方の旗を見せる行動も取っている。彼女やアボリジニを取り巻く状況や思いがこの1枚から読み取れる、と先生は語る。「オセアニアにある国の多くが、アメリカやイギリスの支配を受けた歴史を持っています。これらに焦点を当てることで、英米の影の部分が見えてくる。研究者として、こうした角度からアメリカ文化を見つめる姿勢を大切にしたいと考えています」

### 自ら考え、動く。「行動する知性」の獲得を

先生のゼミには、アメリカ文学はもちろん、映画や音楽、食など、文化面に関心を持つ学生が集まる。先生が重視しているのは「オリジナリ

ティ」。研究を通じて、自分ならでの視点や見解を育み盛り込むよう指導しているそうだ。「そのためには、本当に面白い、深く追究したいと心底思えるようなテーマを見つけ、発表の際に、どんな点を自分のオリジナリティとしてとらえているかを学生に問い、自身の姿勢や考えを突き詰めさせているという。」

期待するか訊くと、「自ら考え、行動する力」という答えが返ってきた。「大学進学率が向上しているとはいえ、皆が皆、高等教育を受けるわけではありません。学生の皆さんには、大学で学ぶことに自覚的であってほしいと思います」

1885年に創設された中央大学は、「實地應用ノ素ヲ養フ」、具体的に実証性のある学問を重視することを建学の精神に据え、多くの人材を世に送り出してきた。建学の精神はその後、創立125周年を迎える際に時代に即して発展させたものとして定められた「行動する知性。— Knowledge into Action —」というユニバーサル・メッセージに受け継がれた。この精神のもとで学ぶ大学の学生には、ただ知識を習得するだけでなく、それをもとに自分の考えを確立して具体的な行動につなげる、その意識を大切にしたい。

入学センター所長でもある先生は、学生への思いをそう語った。

2014年9月取材当時



“Close up,”

**現在の研究テーマを教えてください**  
環太平洋文学文化

**ご趣味は？**  
サッカー。観戦だけではなく、プレーヤーとして3つの社会人チームに所属しています。

**どんな高校生でしたか？**  
サッカーに一生懸命でした。しかし、当時は今のようなプロ制ではなかったし、自分にそれほど才能があるとも考えていなかったの、将来は何らかの仕事をするのだろう、それなら社会と接点のある職種を選ぼうと思っていました。

**高校生の頃の夢は？**  
取材や考えること、書くことに興味があり、ジャーナリズムに進みたいと思っていました。

**お薦めの本を3冊あげてください**

- 『学ぶこと 思うこと』 加藤周一（岩波ブックレット）  
東京大学で開催された新入生対象の講演会を再構成したもの。知の先達による、学びへのストレートな導入教育が展開されています。
- 『新編 平和のリアリズム』 藤原帰一（岩波現代文庫）  
国際政治学者が、湾岸戦争や9.11など時事問題について発表した文章をまとめた一冊。真の「平和」について考えさせられます。
- 『紅一点論 アニメ・特撮・伝記のヒロイン像』 斎藤美奈子（ちくま文庫）  
「世界は『たくさんの男性と少しの女性』でできている」という現実観察のもと、子ども向けフィクションの世界観が、大人の現実と地続きであることが浮き彫りにされます。

**先生にとっての“特別な一冊”は？**  
『学ぶこと 思うこと』加藤周一（岩波ブックレット）  
「学んでも自分で考えなければ本当の知識にならないし、自ら考えても学ばなければその人の行動は危うい」という論語の教えを踏まえ、大学に入学する学生へ、学びへの指針を

提示するものです。深みのある内容をわかりやすく説いており、教員の私にとっても参考になります。

**高校生へメッセージ**  
目先の受験テクニックにとらわれず、着実に基礎学力をつけてほしいと思います。大学で伸びるかどうかは、この点にかかっています。そして柔軟な感受性と旺盛な好奇心を枯らさずに進学していただきたいと願っています。



「思考力を鍛える」という視点から選ばれた3冊。

加藤周一は先生が学生時代から親しみ、影響を受けている評論家。全集も揃えている。